

江湖詩社の松魚詠

新 稻 法 子

はじめに

一 詩語「松魚」

二 松魚詠の背景

三 松魚詠の「典衣」

四 松魚詠の変奏

詩風転換以降、江戸で活躍した江湖詩社の詩人たちが生み出した詩語「松魚」の成立から展開を追った。松魚詠は寛政二年に刊行された柏木如亭『木工集』に収められているものが最も早く、「典衣」という表現が特徴的である。もともと衣を質に入れるという「典衣」は酒を手に入れるための行為または貧しさの描写に用いられる詩語であり、初鯉のような贅沢品を買うことに用いられるものではなかった。清新派と呼ばれた江湖詩社の詩人たちが真情を重んじて眼前の景物を詠んだことが、新しい表現を可能にしたのである。松魚詠が現れた寛政期、如亭と親しかった山東京伝が黄表紙や洒落本に裕を質入して初鯉を買うという表現を盛んに用いており、漢詩が戯作と同じ文苑で時流を敏感に反映していることがわかる。江戸の初夏を詠むのに用いられた「松魚」は化政期には定着し、旅先にあつては江戸人にとつての「尊羹鱸膾」となり、幕末に受け継がれていった。

はじめに

文化文政期に江戸の詩壇の中心にあったのは、かつて市河寛齋が主宰する江湖詩社に集った詩人たちである。大窪詩仏は詩聖堂と名付けた豪奢な邸宅を構え、華やかな交遊で知られた。菊池五山は『五山堂詩話』を刊行し、その批評は詩壇で大きな力を持った。遊歴の詩人となった柏木如亭もまた、旅先で江戸の人らしい洒脱な作品を詠んでいた。

彼らは安永天明期に江戸における詩風詩論の転換を牽引する存在として詩壇に登場した。清の袁枚の真情を重んじる詩論を取り入れ、それまでの盛唐詩風とはうって変わって南宋詩風の詩を詠んだ。『作詩志叢』で護園派の詩を「偽唐詩」と呼んで激しく非難した山本北山と繋がり、和刻本出版にも関わって南宋四大家を世に広めた。

唐詩風から宋詩風へと言われるこの詩風転換は、単にそれまで作詩に用いられていた盛唐詩の詩語を南宋詩に置き換えることではなかった。護園派の詩人が盛唐詩という規範に自らの詩情を収めたのに対して、清新派と呼ばれた江湖詩社の詩人たちは真情を吐露することを優先した。自らを『唐詩選』中の人物であるかのように詩の世界を作り上げるのではなく、眼前の景物に即して真情を詠むようになったのである。

彼らの眼前に広がっていたのは、他ならぬ近世の日本の景物である。南遷し臨安が首都になった南宋の田園詩は、日本によく似た気候の下で詠まれたため、作詩の参考にしやすいかった。日常生活を細やかに描いた作品も日本の市井の詩人には親しみやすかった。南宋詩のこのような要素は、新しい詩論の下で作詩する際に格好の規範となったのである。

詩風転換以降の詩人たちは、自分たちの真情を詠むために南宋詩を利用しただけでなく、日本独自の題材をも躊躇せず詠むようになった。従来は和習として、また卑俗であるとして斥けられてきたものが、詩料として加わったのである。詩風転換は一面では漢詩の日本化であったといえる¹。

このように日本化した作品に関しては、漢詩としての典拠や表現だけでなく、詩人の位相を念頭に置き、鳥瞰的な視点を持つてこそ初めて理解されるだろう。本稿では、その典型的な例として詩語「松魚」を取り上げ、江湖詩社の詩人たちがいかにして彼らの真情を表現できる詩語として確立させていったか、その系譜を明らかにしたい。

一 詩語「松魚」

かつて江湖詩社が開かれた所縁の神田お玉ヶ池に大窪詩仏が詩聖堂を構えたのは文化三年のことであった。化政期

の江戸で最も愛されたこの詩人の風雅な邸宅には、貴賤を問わず客人が絶えることがなかったという。詩聖堂には連日のように芸妓が招かれ、名高い料亭八百善から仕出し料理が届けられたと、清水礫洲がその随筆『ありやなしや』に伝えている。

詩仏が鼻肩にしていた八百善は、上方に対する江戸の料理の完成に大きく与った老舗である。四代目主人栗山善四郎は家業に甚だ熱心な器量人で、『料理通』を刊行した。料理本としては異例の四編まで続いた各編には、錚々たる文人が序を寄せており、それがまたこの書の魅力の一つであるのだが、文政八年刊の二編を繙くと、谷文兆描くところの鰹の図に、詩仏が次の七言絶句を題している。

新味初來上店時 新味初めて來たり店に上る時
萬錢爭買貴珠璣 万錢争い買いて珠璣よりも貴し
呉人謾道鱸魚美 呉人謾りに道う鱸魚の美なるを
誰爲鱸魚典却衣 誰か鱸魚の為に衣を典却せん²

転句は張翰が秋風に故郷の蓴菜の羹と鱸の膾を思い出し、職を辞して帰郷したという『晋書』張翰伝の故事を用いている。呉の人張翰は鱸が美味だと言うが、その鱸を味わうために「衣を典却」、着物を質入れした人はいらぬのだから

か。我々江戸っ子はこの初鰹のためには着物を質に入れるのも辞さないのだがね——詩仏はこう結んで鰹を賞賛した。『料理通』を飾るにふさわしいこの七絶は、詩仏の『詩聖堂詩集』にも「松魚」と題して収められているから、宴席で戯れに詠んだだけというものではないだろう。この一つ間違えれば俗に陥りかねない「松魚」という語は、化政期の江戸詩壇においては既に正集に収められる詩語として定着していたのである。

鰹を漢詩に詠んだ例としては、おそらくは後で触れる新井白石の七言絶句が最も早い例の一つに挙げられるが、詩語として確立させたのは江湖詩社の詩人たちであったといつてよい。最も早くから市河寛齋に学んでいた柏木如亭が、江湖詩社にいたころ詠んだ初夏の詩に鰹が詠まれている。

買春錢盡子規初 春を買いて錢尽く子規の初
綠樹漸深過雨餘 緑樹漸く深し過雨の余
欲解新衣當新味 新衣を解きて新味に当てんと欲す
朝噉窗外賣松魚 朝噉窓外松魚を売る³

春の行楽で手持ちを使い果たしたころ、今度はほととぎすが鳴き始めた。雨に濡れてみずみずしい新緑もだんだん濃くなっていく。そろそろ単衣の季節だが、旬の味を味わう

ためにはかまうものか、その単衣だつて手放そう。朝日が差し込む窓の向こうでは、威勢のいい鯉売りの声がしているのだ——。袷を質に入れて松魚を買うという表現はよくあるが、如亭は「新衣」というのだから、これから着る単衣でもかまわず質入れするのだろう。

寛政二年刊行の『木工集』に収められているこの七言絶句こそが、詩語「松魚」の萌芽と考えられる。ちなみに『詩本草』によると如亭は

其作松魚者此方俗間文字。然沿襲亦舊矣。以比鯉鯉字、則覺其稍雅。

其の松魚に作るは此の方俗間の文字なり。然れども沿襲亦た旧し。以て鯉鯉の字に比ぶれば、則ち其の稍や雅なるを覺ゆ。

と述べており、「松魚」を日本独自の表記だと認識した上で敢えて使用している。

以下、この松魚詠の広がりを見ていこう。

大窪詩仏が寛政十一年に上梓した『詩聖堂詩話』には、この如亭の七絶に触発された詩人たちが鯉を詩料としたであろう様子が窺える。詩仏は篆刻家増田董斎の作を紹介し

ているが、その「四月」と題する七言律詩には

山雨晴時繁嫩綠 山雨晴るる時嫩綠繁し
海雲破處過新鵑 海雲破るる処新鵑過ぐ
漁郎恰報松魚信 漁郎恰も報ず松魚の信
便是鎌倉四月天 便是是れ鎌倉四月の天

と、「嫩綠」・「新鵑」則ち青葉・ほととぎすに続いて「松魚」が詠まれている。市河寛齋の「董斎印譜序」には「萬頃（董斎・筆者注）と永日（如亭・同）とは一輩人也。既に其の居を同じくす。又其の貧を同じくす。嗜好・臭味、悉く同じからざるは莫し。而して其の異なる所の者は面と業とのみ」⁵（原漢文、以下同じ）とあるから、董斎が初夏の詩に鯉をとりあげたのは親しかった如亭の影響であろう。詩仏はこの段を前掲の如亭の「夏初」一首を引用して締めくくっている。

詩仏自らも豊漁の松魚を詠んだ七言絶句「四月」を寛政十二年に上梓した『詩聖堂百絶』に収めている。

氣候清和四月天 氣候清和四月の天
秧針抽翠似鋪氈 秧針翠を抽きて氈を鋪くに似たり
今年又是豐年兆 今年又是是れ豊年の兆

上店松魚不抵錢 店に上る松魚錢に抵たらす⁽⁶⁾

また、『詩聖堂詩集』初編卷四にはほととぎすと鰹を領聯に仕立てた七言律詩「初夏」がある。

日高眠足起來初 日高く眠足りて起き來たる初
復見庭蕉一扇舒 復た見る庭蕉一扇の舒ぶるを
昨夜窓前聞杜宇 昨夜窓前杜宇を聞き
今朝街上賣松魚 今朝街上松魚を売る

(略)⁽⁷⁾

『詩聖堂詩集』初編は文化七年の刊だが、所収作品の詠まれた時期の早いものは寛政元年に遡る。つまり、これら初期の松魚詠は、寛政年間に集中して詠まれたことが推測されるのである。

菊池五山が文化十年に刊行した『五山堂詩話』巻七には、北原秦里の七言律詩「松魚歌」が掲載されている。

南州海浜百里餘 南州の海浜 百里余
一年兩度釣松魚 一年兩度 松魚を釣る
春雨椒芽抽綠後 春雨 椒芽の緑を抽く後
秋霜柚實吐香初 秋霜 柚実の香を吐く初

研上氷盤呼歡伯 研りて氷盤に上して歡伯を呼び
金壺玉膽非所敵 金壺玉膽 敵する所に非ず
新鮮遠致恨無由 新鮮遠く致する由無きを恨み
空以乾脯送萬國 空しく乾脯を以て万国に送る⁽⁸⁾

北原秦里は土佐の人、最後の句の「乾脯」は鰹節のことである。土佐の名物である鰹を詠んだこの詩を、五山は「此れ如亭の蕎麦の歌と風格相類す」と如亭が信州で名物の蕎麦を詠んだ詩と並べて評している。

五山自身については、火災で家集を失ったという事情もあり、いまだ松魚詠のあることを知らないが、「五山堂詩話逐年課題」という天保六年の一枚刷りが残されている。⁽⁹⁾これにより五山が十九年にわたって作詩指導で課した詩題を知ることができるが、月毎に分かれた四月の項を見ると、文化丁丑（十四年）には「松魚膾」と「芭蕉新展」、文政戊子（十一年）には「虞美人草」「松魚初出」と「松魚」が出題されており、化政期に鰹が詩題として定着していたことがわかる。

江湖詩社の周辺では、盟主寛斎の嫡子で書家として一家をなした市河米庵が、親友頼山陽・大窪詩仏・菊池五山の書き込みを附して天保二年に上梓した『米庵先生百絶』に六言絶句「初夏」があり、

三尺松魚出海 三尺の松魚海を出で

一聲杜宇穿雲 一声の杜宇雲を穿つ

報知朱夏消息 報知す朱夏の消息

二物偏能策勲 二物偏に策勲に能う¹⁰

と鯉とほととぎすを詠んでいる。

江湖詩社の詩人たちの次の世代にも、松魚詠は受け継がれていった。天保三年、お玉ヶ池に玉池吟社を開いた梁川星巖は、老境に入った詩仏や五山に代わって江戸詩壇に大きな影響力を持つようになったが、やはり鯉を詠んでいる。『星巖丙集』巻八夷白蠹集に収められた「食鉛錘魚有感 鉛錘魚を食らいて感有り」という古詩には、

(略)

今春江府花漸殘 今春江府花漸く残す

杜宇聲聲啼不已 杜宇声声啼いて已まず

鉛錘又落夢想間 鉛錘又落つ夢想の間

異味不須占食指 異味須たず食指を占するを

豫備一囊買命錢 予め備ふ一囊の買命錢

果然頭魚來上市 果然頭魚来たりて市に上る

手忙脚忙喜欲顛 手忙脚忙喜びて顛せんと欲す

鑿刀斫膾香流齒 鑿刀斫膾を斫りて香齒に流る

(略)¹¹

と、ほととぎすと共に鯉を詠んで、李漁が蟹を買うための資金を「買命錢」と呼んだ故事を鯉に用いている。また『星巖丙集』巻十余燼集の「食松魚 松魚を食らう」という七言絶句にも、

鵲啼夏木綠扶疎 鵲啼いて夏木緑扶疎

正是鉛錘入市初 正に是れ鉛錘市に入る初

劫火歷來能不死 劫火歴来たりて能く死せず

天留饑口喫頭魚 天饑口を留めて頭魚を喫せしむ

と江戸の大火を生き延びた感慨を鯉を題材に詠んでいる。これらの詩において、江湖詩社の詩人たちよりも重厚な詩風の星巖は、鯉を表すのにしばしば「松魚」ではなく本草書などに見られる「鉛錘魚」という語を用いている。

柏木如亭に心酔し遺稿の上梓に奔走した梁川星巖の鯉の詩が、如亭の影響下にあることは明かである。「松魚を食らう」の「饑口」、口が卑しい人という詩語が如亭に由来することは拙稿で触れたことがある。¹²『星巖丙集』巻三帰省集の「食鯉魚膾有憶如亭山人 鯉魚膾を食して如亭山人を懐ふ有り」においても、

(略)

松魚上市寧辭貧 松魚市に上りて寧ぞ貧を辞せんや
 不惜一頭抛千緡 惜しまず一頭千緡を抛つことを
 如亭山人饒最老 如亭山人饒最も老
 對床相呼鬪百珍 對床相呼びて百珍を鬪はす

(略)

と旅先で鯉の洗いを食べながら、江戸の初鯉と如亭のことを思い出している。

『江戸繁昌記』の著者寺門静軒は、その漢詩版ともいえる『太平詞』夏の巻(天保五年七月序)の冒頭をやはり「初鯉」で飾り、

(略)

入時松魚貴若珠 時に入る松魚貴きこと珠の若し
 棘蠶比目視爲奴 棘蠶比目は視て奴と為す
 吳人何誇又何憶 吳人何ぞ誇らん又何ぞ憶はん
 千里蓴羹四腮鱸 千里の蓴羹四腮の鱸
 都人賣之都人買 都人之を売りて都人買ふ
 典却夾衣不曾悔 夾衣を典却して曾て悔みず

(略)¹³

と江湖詩社の詩人たちと同様、蓴羹鱸膾を上回るものとして鯉を称え、これを買うためなら裕を質入れしても後悔しないと詠んでいる。

寛政年間に如亭が試みた松魚詠は、化政期には定着し、江湖詩社からその周辺に広がっていった。幕末には、江湖詩社の詩人たちの次の世代の作者も、江戸の初夏の詩料として「松魚」を詠むようになっていたのである。

二 松魚詠の背景

一步間違うと和臭に陥りかねない「松魚」を詠む後押しをしたのは、真情を詠むことを重んじる詩論であった。江湖詩社の詩人たちに大きな影響を与えた山本北山は、護園派の盛唐詩風の詩を「偽唐詩」と呼んで批判した。南宋詩風の詩も、宋人を気取って詩語を並べるのでは宋詩のまがい物になってしまふ。真情を以て江戸のリアルを漢詩に詠むのならば、初夏の詩には、ぜひとも鯉売りの威勢のよい声、盤上に上る旬の味覚を取り上げなければならぬ。「目には青葉山ほとゝぎす初松魚¹⁴」と山口素堂が詠んだ「青葉」は「緑樹」「嫩緑」、「ほとゝぎす」は「子規」「新鶉」と詩語に存在する。これらに加えて、「松魚」はどうしても必要な詩語だった。

詩風転換の陰には、それまで主流であった護園派の強烈

な中国趣味に対する反動が大きな要因の一つとしてあったと考えられる。「呉人謾りに道う鱸魚の美なるを 誰か鱸魚の為に衣を典却せん」(大窪詩仏「松魚」)、「呉人何ぞ誇らん又何ぞ憶はん 千里の蓴羹四腮の鱸」(寺門静軒「太平詞」夏の巻)というような、唐土を否定して日本を称揚する表現が表れたのも、この文脈で理解できよう。このことに関しては桜花詠をとりあげて既に考察したことがある。¹⁵⁾

ところでこの詩風転換の原動力となつた漢詩の日本化以外にも、松魚詠を生み出した要因はいくつか考えられる。ここではそれについて指摘しておこう。

一つは、盛唐という時代の枠がなくなつたことで、食べ物のような俗な題材を詠んだ詩も作詩に取り入れられるようになったことである。

格調を重んじる詩風転換以前の詩人たちにとって、口に入る物は酒以外すべて俗であつた。例えば祇園南海は『詩学逢原』において雅俗の別について説いているが、「コレヨリ後、白樂天、張籍カ徒ヨリ宋朝ニ至リ、アラユル俗趣ヲエナリトシ、東坡ニ至リテ、又専ラ飲食ノコトノミ言フ、卑陋ノ中ノ尤卑陋ナルコト、悪ム可ク咲フ可シ」¹⁶⁾と盛唐を過ぎると詩が俗になっていくこと、蘇軾に飲食の詩が多いことを批判的に述べている。詩風転換以前の詩人としてそ

いった詩をまったく詠まないではなかつたが、少なくとも正集には収めようとしなかつた。「蓴羹鱸膾」の故事も、あくまでも望郷の念を表す雅な故事として用い、間違つても味や食べ方などには言及しないのである。

これに対して規範は盛唐詩という制限がなかつた江湖詩社の詩人たちは、食べ物そのものを描写する詩に対する抵抗感がなかつた。漢文で記されたグルメ随筆『詩本草』を著した如亭にそれは顕著で、たとえば蘇軾の「食荔枝 荔枝を食す」に異国の見知らぬ果実を想像し、梅堯臣の五言古詩「范饒州坐中客語食河豚魚 范饒州の坐中、客河豚魚を食することを語る」を「冬日食河豚 冬日河豚を食す」に引用している。

二つめとして、詩人たちがその生活様式に憧れた明清の文人たちが、食生活を軽んじなかつたことがある。元の韓奕と明の周履請による『易牙遺意』、明の高濂の『遵生八牋』、清の顧仲の『養小錄』、清の王士禛の『青憲鴻秘』など、食べ物について記すのを憚らない作品が次々と記された。こういった書物を江湖詩社の詩人たちがどの程度見ることができたかはわからないが、食生活も詳しく記している李漁の『閑情偶寄』を如亭が読んでいたことは、『詩本草』への影響関係から明らかである。¹⁷⁾

ちなみに詩会の開催や詩話の刊行、女弟子の存在など、

文人としての生活様式で日本の詩壇に大きな影響を与えた袁枚に、『随園食单』と題する現在でも有名なレシビ集がある。江湖詩社の詩人たちは明清の文人のうち袁枚にもっとも親しんだ。市河寛齋は『小倉山房文集』を抄録した『随園詩鈔』を刊行し、大窪詩仏が序を寄せている。また、『随園詩話』の和刻本は神谷東溪鈔録、柏木如亭較閲で山本北山が序を寄せている。しかし『随園食单』については、揖斐高は「おそらく如亭は『随園食单』を目にする機会はなかったであろうし、その存在すら知らなかったのではあるまいか」と述べており、稿者もそれに同意する。如亭だけでなく江湖詩社の詩人たちも『随園食单』を知らなかったと考えられる。もし知っていたら、グルメだった如亭や八百善の得意客だった詩仏が『随園食单』に言及していないのは不自然だからである。ただこういつた書物を著すような美食家の姿勢は、袁枚の他の著作にも表れていて、江湖詩社の詩人たちに影響を与えたであろう。

松魚詠を可能にした背景の三つめは、詠物詩の流行である。詠物詩とは物の名を題として詠む漢詩で、その発生期である六朝の時代から、しばしばサロンで用意された詩題をいかに巧みに詠むか功を競い合うという、和歌における題詠のような役割を果たした。五山は大沼枕山の『枕山詠物詩』に序を寄せ、「余、人をして詩率を字ばしむるに詠

物を以て課題と為す¹⁹」と述べているが、詠物詩はしばしば作詩指導に用いられた。詩会ではあらかじめ与えられた宿題とその場で詠む席題を用いるのが一般的である。先に挙げた「五山堂詩話逐年課題」が、まさにその詩題である。

安永・天明年間の京阪の詩壇で詠物詩が流行したことは、既に揖斐高が指摘している。江戸においても文化十二年に清の康熙帝の勅撰『佩文齋詠物詩選』を館柳湾が和刻しており、天保十一年には大沼枕山の『枕山詠物詩』が上梓され、上方にやや遅れながらもこの詩体の流行したことを窺わせる。

詠物詩集はしばしば詩題ごとに本草書のように分類され、飲食類の部があり、必ずと言って良い程食べ物の詩が収められている。詠物詩というものは、その性質上より詠みにくい題材を求めするため、卑俗な食べ物も積極的に詠むというイメージがあつたのではないだろうか。例えば『詠物詩選』をもじつた『青物詩選』という狂詩集がある²⁰。青物つまり野菜中心に食べ物を題材とした狂詩が集められているのだが、これなど詠物詩の持つ性質の一端を穿つものといえよう。

安永九年に伊藤土善が上梓した『日本詠物詩』飲食部には、新井白石が鯉の刺身を詠んだ七言律詩「鯉魚膾」が収められている。白石は享保十年に没しているから、寛政年

間に江湖詩社で詠まれた鯉の詩よりずいぶん早い。

三 松魚詠の「典衣」

鑿刀揮刃尺霜凝 鑿刀刃を揮ひて尺霜凝る
勢若風湍浪作層 勢は風湍の浪の層を作すが若し
落組紅霞飛片片 組に落ちて紅霞飛びて片片
堆盤紫石疊稜稜 盤に堆くして紫石疊なりて稜稜
中廚應洗千鐘酒 中厨応に千鐘の酒を洗うべし
上客宜供六月水 上客宜しく六月の水を供するべし
卽識東南佳味在 卽ち識る東南佳味の在ることを
金盞玉膾亦何稱 金盞玉膾亦た何ぞ称せん

ただ江湖詩社の松魚詠は、「夏初」「四月」「初夏」という題からも明らかなように初夏の詩料として鯉を詠むのに対し、詠物詩はあくまでも技巧を競うために特殊な状況で詠まれるものである。白石の正集にもこういった食べ物を詠んだ漢詩は殆ど収められておらず、僅かに『白石先生余稿』卷三の「戯詠西瓜 戯れに西瓜を詠ず」、『白石先生遺文拾遺』の「蕎麦麵」が目につく程度である。

従って、白石の詠物詩を以て松魚詠の濫觴ということはできない。しかし、詩の題材を飲食にまで広げた詠物詩の流行は、詩風転換後に松魚詠を含む食べ物の詩が受け入れられる土壌となったということができるだろう。

松魚詠に特徴的な表現として「典衣」、衣を質入れするという表現がある。既に示したように、最も早い松魚詠である柏木如亭の七絶「夏初」は、転句に「新衣を解きて新味に当てんと欲す」と詠んでいた。衣を解くのは言うまでもなく質入れして鯉を購うためである。「料理通」にも収められた詩仏の七絶にも「誰か鱸魚の為に衣を典却せん」といい、寺門静軒の『太平詞』も又「夾衣を典却して曾て悔ひず」と、「典衣」、着物を質入れするという表現を祖述していた。

柏木如亭の『詩本草』には、『如亭山人遺稿』にも収める七言律詩「駿州道中食松魚 駿州道中松魚を食らふ」を記す段に、鯉をめぐる熱狂について次のように述べている。

此余在駿河桑苳堂處食松魚而所作也。松魚卽葛質屋、吾鄉一大奇品。四月初上店則滿城競賞之其價如異寶矣。或至有爲之相狂至有典衣脫刀辨之者。

此余が駿河の桑苳堂が処に在りて松魚を食らいて作る所也。松魚は即ち葛質屋、吾が郷の一大奇品なり。四月初めて店に上れば則ち滿城競いて之を賞し其の

価異宝の如し。或いは之が為に相狂じて衣を典し刀を脱して之を弁ずる者有るに至る。

江戸に生まれ育った如亭が「吾が郷の一大奇品なり」と記した如く、初鰹を尊ぶことは江戸では重要な食文化であり、その流行は天明年間を頂点に化政期まで続いた。初物が珍重されたのは上方も同様であるが、鰹に関しては上方では鰹節として用いて生食することはなく、初鰹の流行は見られなかった。

近世後期の江戸では、料理に関しても上方の強い影響から次第に昌武の都市にふさわしい独自の展開を見せた。鰹は「勝つ魚」に通じることから、つとに武家に珍重されていたが、とりわけ初鰹は、いわゆる江戸っ子と称せられる人々の気風を反映して喜ばれた。

この「典衣」という詩語、衣を質入れするという表現は、松魚詠が単に新奇な題材として鰹を詠んだものではなく、江戸の詩人にとつての真情を詠んだ真詩であることを示しているものなのである。

そもそも「典」という文字は質入れすることを意味するが、「典衣」という詩語でまっ先に思い起こされるのは杜甫の有名な七言絶句「曲江」の首聯である。

朝回日日典春衣 朝より回りに日に春衣を典じ
毎日江頭盡醉歸 毎日江頭に酔いを尽くして帰る

ここで杜甫が衣を質に入れて口にするのは酒である。江湖詩社の詩人たちが広めたとされる南宋詩にその用例を見てみよう。山本北山や大窪詩仏によって和刻された『放翁先生詩鈔』にも収められている陸游の七言律詩「初春遣興初春興を遣る」の一句に

典衣剩爲江頭醉 衣を典じて剩え江頭の酔いを為す

というのは、明らかに杜甫を踏まえている。同じく七言絶句「春前六日作 春前六日の作」でも

典衣沽酒莫辭醉 衣を典じ酒を沽う酔いを辞すること

莫かれ

自有梅花爲解醒 自から梅花の為に醒を解する有り

と酒のために衣を質入れしている。

酒に替えない場合、衣を質入れするのは貧しさ故、その憂愁をうたう場面に用いられる。陸游の七言律詩「示客客に示す」には

典衣未贖身饒風 衣を典じて未だ贖なわず身に蝨饒く
治米無工飯有沙 米を治める工無く飯に沙有り

とある。同じく北山や詩仏ら江湖詩社に関わる詩人たちによつて和刻されたものから例を挙げると、方秋外『秋崖詩鈔』には五言古詩「感風謝客 風に感じて客を謝す」に

吾貧目前了 吾が貧目前を了し
遞脱春衣典 遞に春衣を脱し典す

といい、『石湖先生詩鈔』七言古詩「楽神曲」には

去年解衣折租佃 去年衣を解いて租佃を折む
今年有衣着祭社 今年衣有りて祭社に着る

と衣を手放して年貢を収めるという。

このように「典衣」、衣を質入れするという俗の極みのような表現は、元来、雅語であり、酒を手に入れるのでなければ貧しさを憂う詩に用いられる。

祇園南海が天明七年に刊行した『南海詩訣』の「詩法雅俗弁」には、おそらく「曲江」の例についてであろう、「酒債典衣ハ雅事、子美モ用フ」という。しかし江湖詩社の詩

人たちより前の世代である南海は「酒債典衣モ杜子美ニテハ面白シ、常人ハヲカシカラズ、タゞ無キ事ヲ言ノ類ニテ卑シ」²⁶と安易な使用を諷めている。初鯉のように贅沢な食べ物を手に入れるという表現は、中国の詩や、日本の詩風転換以前の詩からは、見つけるのが困難なのである。

では日本の同時期の韻文に着物を質入れして初鯉を食べるといふ表現があるかという点、意外にも見出だし難い。素堂の名高い一句「目には青葉山ほとゝぎす初松魚」を引き合いに出すまでもなく、俳諧では、鯉は夏の季語として早くから詠まれていた。「もとより我は江都のはえぬきにして」「江戸の四流に産れて、老まさるまで地を改めず」と記された米仲の『鞞随筆』には、「鯉は江戸風の魚なり」と書き出した鯉についての一節があるが、衣を質入れするといふ表現は見当たらない²⁶。

この表現を好んで用いていたのは、山東京伝であった。流行を敏感に反映する黄表紙では初鯉もしばしば登場し、恋川春町や大田南畝も取り上げていた。しかしそれはあくまでも当世風の食べ物としてであった。ひとり京伝が、衣を質に入れてでもこれを食べねばならぬ、という表現で初鯉を描いたのである。

京伝の著作のうち初鯉が現れる最も早いものは、天明六

年刊の黄表紙『江戸春一夜千両』の

尻の穴のひろいお江戸のはへぬきは、千両の大門もう
たばなどかうたざらん 目の出る堅魚も喰ばなどか喰
ざらん。⁽²⁾

のようであるが、これにはまだ具体的に「典衣」の表現は
出てこない。京伝が「典衣」の表現を用いた最も早い物は、
天明八年に刊行された『仁田四郎富士之人穴見物』である。
同書は松平定信に擬したとも言われる野暮で吝嗇な武士、
仁田四郎に、江戸っ子の気風を学ばせるという趣向である
が、

江戸っ子のけつの穴を覗き見れば、生上田の袷を質に
入れて、一ツ本で二分の初松魚を買ふ。また千両の角
屋敷を売払つて、呼出し昼三を身請する体、ありく
と見へる。仁田これを見て、まことに江戸っ子のけつ
の穴の広きところを感じ、今までおのれが、けちく
したことを明らめ、今までのお先真暗、よほど明るく
なる。

と、上田紬の極上品の袷を質に入れて初松魚を買うという

表現を用いている。

如亭の松魚詠が収められた『木工集』と同じ寛政二年刊
の『冷哉波立清水記』には雑兵を描いて

明日をも知れぬ命ゆへ、雑兵手合も、物を蓄ゆる心な
く、上戸は酒に一日の賃金を使捨て、下戸は餅を食つ
てしまひ、慰み好きは、めぐりと出掛け、昼の戦ひよ
り、夜の合戦が大乱なり。ちといたつた奴は、鎧を脱
いで、初鯉を買つて食ふも有。それ故、宵越しの銭は
持たず、戦の休みのうちは兵糧を買う銭もなく、ピイ
くくと言つて苦しがる。やつぱり今の代の芝居者の気
取りなり。

とある。「鎧を脱いで、初鯉を買つて食ふ」のは当世の
「典衣」の置き換えである。同じく寛政二年に上梓された
『張かへし行儀有良札』には金銀がじゃまになる世界を描
いて

又、袷を質に置いて、初鯉買ふといふ様な奢りも、一
ツ切する者なければ、初鯉も塩にして売歩く。

といい、また同年の洒落本、『京伝予誌』に、

或は初堅魚の名代に袷をくるしめ、こゝが江戸っ子の尻の穴の広き所と、隣家のとくじつをそしりながら、これを喰ひ、

という同様の記述がある。

この寛政二年は、京伝の作品に鯉が頻出する年である。袷を質入れるという表現を抜きにすれば、黄表紙『地獄一面照子浄顔梨』に小野篁が餓鬼道を見物する場面で初鯉の刺身を食べることできぬ苦しみを描き、『山麴鳩蹴転破瓜』には初鯉の刺身はその新鮮さを重んじると記している。

寛政三年の黄表紙『世上洒落見絵図』では、鳶が当世ぶって初鯉を買うとして、通人の行き過ぎを揶揄し、また同年の『悪魂後編人間一生胸算用』にも初鯉が描かれている。寛政五年刊の滑稽本『三国一本松魚知慧袋』には

石をうつつ羊となせば、袷をまげて鯉となし、

と再び袷を質入れる表現があり、寛政六年刊『忠臣蔵前世幕無』の序、前世尽くしにも

初松魚の前生は袷

同年の『栄花夢後日話金々先生造化夢』にも、

もはや、そろ／＼秋の風を吹かせよう。したが人間が目にはさやかに見へねども風の音にぞ驚かれぬるなど、初鯉の身代りに沈めておいた袷の事を思ひ出すであらふ。

享和二年刊「延命長尺御詠染長寿小紋」の「命と思ふ袷質屋へ行く」にも、

己が命と思ふ此上田の袷を曲げて買ふ鯉だ、負けさつせえな。

とあって、京伝の作品中に袷を質入れて鯉を食べるといふ表現は枚挙に暇がない。

西山松之助氏は、江戸っ子の氣質を典型化したのは山東京伝であること、天明期の初鯉人氣が江戸っ子の成立を考える上で重要であることを既に指摘されている。⁽²⁸⁾ここで当時の文芸に、その初鯉を袷を質入れてまで購うという表現を持ち込んだのも、山東京伝、そして江湖詩社の詩人たちであることは、付け加えられてよいであろう。

如亭や詩仏の松魚詠の「典衣」という表現は、京伝の黄

表紙や洒落本とその基盤を共にする同工異曲であったと位置づけられるものである。

「典衣」は雅俗のそれぞれの文芸に独立して取り入れられたのではなく、如亭と京伝は旧知の間柄であった。早稲大学には京伝の洒落本『傾城買四十八手』が蔵されている。これは如亭が書き込みをし、弟山東京山が持っていた一本の写しであり、かつて神保五彌氏によつて紹介されたことがある²⁹。京山はその識語で如亭と京伝は「烟花の断琴」であったと記している。断琴とは『列子』知音の故事、「烟花の」断琴というからには如亭と京伝は恐らく江戸吉原で互いに通人たることを競い合った遊び仲間であったのであろう。

自ら「余少時嘗て北里の中に在りて酒海肴山に墮す」という如亭は、後世まで粹人に喜ばれた「吉原詞」の作者で、いわゆる十八大通の文魚とも交流があり、家財を蕩尽して江戸を離れた後も遊歴の先々で艶聞に事欠かなかった。この江戸の詩人は初鯉を京伝同様に味わい、漢詩に詠んだのである。とりわけその七言絶句「夏初」を収めた最初の詩集『木工集』が、京伝の、拾を質に入れても初鯉を食らうという表現を用いた黄表紙と同じ寛政期に上梓されたことは、転換期以降の漢詩が、戯作者と同じ文苑の中で時流を

敏感に反映するものとなつていたことを示している。如亭を初めとする江湖詩社の詩人たちは、初鯉という眼前の景物を題材に真情を詠むために、絶妙のバランスで雅の世界に俗を取り入れたのである。

四 松魚詠の変奏

化政期の詩壇に揺るぎない地位を占める詩人となつた大窪詩仏と菊池五山は、晩年までその基盤を江戸に置き、時に潤筆のために地方へ遊歴するという生活を送つた。大窪詩仏が上方遊歴の作を集めた『西遊詩草』（文政二年刊）の七言絶句「松魚」二首は、旅先で味わつた鯉を詠んだものである。うち一首を挙げる。

斫得如花盤上盛 斫り得て花の如く盤上に盛る
村醪過分數杯傾 村醪分を過して數杯傾く
都人動擲萬錢費 都人動もすれば万錢を擲ち費やす
見此新鮮作麼生 此の新鮮を見れば作麼生³⁰

五山や詩仏と異なり、江戸に帰ることなく遊歴に一生を終えた柏木如亭も旅先で詠んだ松魚詠を二首遺している。『詩本草』にも収められた『如亭山人遺稿』巻頭の七言律詩「駿州道中食松魚」では、如亭は駿河で鯉を味わつてい

る。

東海舊蕩風吹緑 東海の旧蕩風緑を吹く

上店時新斫赤玉 店に上る時新赤玉を斫る

正是江都清和天 正に是江都清和の天

此時口纒遂所欲 此の時口纒所欲を遂ぐ

去年四月在北方 去年四月北方に在り

越海到處不可嘗 越海到處嘗む可からず

今日駿州一咀嚼 今日駿州一たび咀嚼す

大勝夜夢向家郷 大いに勝れり夜夢家郷に向かふに

夢の中で故郷、江戸にいて味わう初鯉よりよほど美味だ
という江戸っ子の瘦せ我慢が痛々しい。

望郷の念を詠む江湖詩社の詩人たちの詩囊には、もはや
「蓴羹鱸膾」の語はなかった。江戸において「典衣」と結
びついて詠まれていた「松魚」は、旅にあつては故郷の初
夏を懐かしむ詩語に変奏された。客死した如亭は七言律詩
「首夏山中病起」に鯉を次のように詠んでいる。

山窗風日患纒除 山窓の風日患纒かに除く

試趁清和出寓居 試みに清和を趁いて寓居を出づ

細響林間流水遠 細響林間流水遠く

残香薜上落花餘 残香薜上落花余る

無人伴從尋句 人の伴を作す無し句を尋ぬるに従せ

有杖扶行不待輿 杖の行を扶くる有り輿を待たず

忽憶江城此時節 忽ち憶ふ江城此の時節

壓街新樹賣松魚 街を圧する新樹松魚を売る

この病、水腫は、如亭の死因となった。揖斐高氏の『柏木
如亭年譜考証』によると如亭はこの前年に身の回りの世話
をしていた弟子を帰している。わずかな文具と詩のみを残
して没した如亭にとって「人の伴を作す無し句を尋ぬるに
従せ 杖の行を扶くる有り輿を待たず」という頽聯は、詩
の世界の中だけの修辭ではなかった。死を目前にした詩人
が初夏を迎えて懐かしむのは、自身はもう二度と味わうこ
とのできぬ初鯉を巡って沸き返っているであろう遠い故郷
であり、かつては自らも通人たることを誇示してそれを味
わった若かりし日々であつただろう。

寛政年間、真情を詠まんとした江湖詩社の詩人たちが試
みた詩語「松魚」は、空間と時間の軸を併せ持った他の何
物にも置き換えることの出来ない詩語として確立し、江戸
の詩人たちによって受け継がれていったのである。

注

- (1) 新稻法子「竹枝詞の変容——詩風変遷と日本化——」(『アジア遊学』近刊予定勉強社)
- (2) 吉井始子編『江戸時代料理本集成』第十卷、臨川書店、一九七八年。『詩聖堂詩集』二編巻七にも「松魚」と題して収められている。
- (3) 以下、『木工集』『如亭山人稟初集』『如亭山人遺稿』『詩本草』は揖斐高編『柏木如亭集』(近世風俗研究会・太平書屋、一九七九年)に収める複製本による。
- (4) 池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第三卷、文会堂書店、一九二一年。
- (5) 『寛斎漫稿』(市河寛斎『寛斎先生余稿』遊徳園、一九二六年)。
- (6) 国立国会図書館蔵本による。
- (7) 佐野正巳編『詩集日本漢詩』第八卷、汲古書院、一九八五年。
- (8) 佐野正巳編『詞華集日本漢詩』第二卷、汲古書院、一九八三年。
- (9) 仁山井直『五山堂詩社逐年課題』東京都立図書館加賀文庫所蔵。
- (10) 大阪府立中之島図書館蔵本による。
- (11) 以下、梁川星巖の漢詩は佐野正巳編『詩集日本漢詩』第十卷(汲古書院、一九八九年)による。
- (12) 新稻法子『詩本草考』『語文』六十七号、一九九七年。
- (13) 『太平文庫2 太平志』太平書屋、一九八〇年。
- (14) 『江戸新道』(大野洒竹編纂校訂『俳諧文庫第三編芭蕉以前俳諧集下』博文館、一八九七年)。
- (15) 新稻法子『江湖詩社の桜花詠』『待兼山論叢』第二十五号 文学篇、一九九〇年。
- (16) 池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第二卷、文会堂書店、一九二〇年。
- (17) 柏木如亭著・揖斐高校註『詩本草』(岩波書店、二〇〇六年)所収の揖斐高による解説。
- (18) (17)に同じ。
- (19) 新日本古典籍総合データベース(DOI:10.207/30/200012616)による。
- (20) 揖斐高『詠物の詩』中村幸彦編『近世の漢詩』、汲古書院、一九八六年。
- (21) 斎田作楽解説『太平文庫60上方狂詩集九種』太平書屋、二〇〇八年。
- (22) 富士川英郎編『詞華集日本漢詩』第九卷、汲古書院、一九八四年。
- (23) 富士川英郎編『詩集日本漢詩』第一卷、汲古書院、一九八七年。
- (24) 新井白石著・市島謙吉編輯兼校訂『新井白石全集』第五卷、吉川半七、一九〇六年。『日本詠物詩』にも収められている。
- (25) 池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第一卷、文会堂書店、一九二〇年。
- (26) 『日本俳書大系第十卷 中興俳話文集 蕪村時代三』日本俳書大系刊行会、一九二七年。
- (27) 『山東京伝全集』第一巻 べりかん社、一九九二年。以下、京伝の作品は全て『山東京伝全集』による。
- (28) 西山松之助『江戸ッ子』吉川弘文館、一九八〇年。
- (29) 神保五彌『洒落本の書き入れ』『近世文芸研究と評論』第

一号、一九七一年。

(30) 佐野正巳編『紀行日本漢詩』第二卷、汲古書院、一九九一年。

(31) 揖斐高編『柏木如亭集』近世風俗研究会・太平書屋、一九七九年。

本稿は平成六年度日本近世文学会秋季大会に於ける口頭発表に基づくものです。御助言戴いた諸先生方に深謝申し上げます。